

西遊夢錄 (三)

瀧川規一

(III) 蘇國豪族一門の服裝

蘇國に旅行するものは勿論のこと、年々倫敦市内のオリンピックで行はるゝ軍隊演技を見、ウエムレイ博覽會で軍隊夜間分列行進を見物した人は蘇國軍人の服裝が特に異彩を放つて居ることに注目する。これ等の服裝の異様なるに氣がついた人々はその服裝の何を意味するかを必ず問ふのである。

彼等の服裝の縞柄の派手なる、而かも縦横縞の縞柄と色との千種萬様なるに細心なる觀覽者は不審の眼を注ぐのである。こんな疑問を前提として蘇國高地人の服裝のことを述べて見たい。

今日吾々旅行者が見る高地人の服裝は決して古代ゴール人が侵入し來りし當時のものをその儘踏襲し來つたものでないことは、今日の和服が數百年以前其儘のものでないと同じである。種々進化の道程を経て來た結果であることは言を俟たないのである。一六〇〇年以前は蘇國及び愛蘭のゲール人はサフロン色の背丈け一杯の大きなシャツを着、その上に膝まで達する厚毛布を恰も僧侶の衣のやうに被つてゐたのだと云ふ。十六世紀に佛王に仕へてゐた世界風土記學者の記する處はさうであるが、今日普段着として男子が着てゐるものが吾

々の眼には抑も變に見える。女子が着て居る可き程の色めいた縞柄の袴を腰から膝まで着てゐる。二色の毛糸にて織りなさせる綾織の織地ツウイドにて作れる胴衣を着てゐる。ボタンは貝ボタンでなくて角製のボタンである。何れも頑丈な brogue と呼ばれる短靴を穿つて居り、平あみにあんだ長靴下をはきカータを着けてゐる。帽子も亦蘇國人特有の帽子であつて Balmoral 帽の型だと人は云つてゐる。小供の着けるニツカールのやうに膝頭を少し外にのどかせてゐることも變に思へる。短袴のことを Kilt と呼んでゐるが、決してズボン吊りや革帶でもたせることをしてゐない、必ず帶で腰の周圍にくよりつけてゐるのである。この袴の着け具合は踞いて袴の裾が辛うじて地に着くか着かぬ位に穿くのが上手な着方だと云ふ。従つて下の hose と呼ばれる長靴下と袴との間から兩脚の膝頭以下が少し露出するのである。まだその上に小供がておかしく思へるのは袴の前面に一つの袋をぶら下げて居ることである。この袋は sporran と呼ばれてゐるが十中八九まで革製のものであつて、往々狐や狸などの獸の頭をその儘使用してゐることがある。時には格子縞の長さ四ヤル巾一ヤル半でふさ縁つきの毛布めいたものを被つて居ることもあれば、時には肩被ひの Highland cape と稱せらるゝものを上

體に着てゐることもある。また時には上述の袴の縞柄が特種
の一族を表象する縦横の色縞で *barren kilt* と呼ばれるものと
と二色縞糸の綾織ツイードのジャコツに胴着丈けを着けてあ
るものもある。何れにしても派手な人目を惹くに足る服装で
あり、またその上に右脚の外に靴下に *Sgan dubh* と云はるゝ
装飾めいたものをつけてゐる。大の男がこんな装飾たつぷり
の服装を着てゐると何だか兎戯に類する感じがする。余が
Hamilton 市の公園内で観る機会を偶然に得た小供によつて
組織されてゐる蘇國の音楽隊の演奏者の服装が悉くこのター
タン、キルトの盛装であつた。盛装の多くの小供が各樂器を
或は手にし或は肩にして吹奏鼓鳴の賑やかな音につれて分列
行進を續ける時の華やかさ賑やかさ可愛さは今も忘れること
の出来ない印象である。

一見こちや／＼複雑を極め装飾めいて居る丈けに蘇國人に
聞くところに入つた形式があつてその説明を聞くだけに煩はしい
程な六つかしがある。殊に各豪族に隸屬することを表象す
る一門の盛服となると、方今諸國で行はるゝ大禮服以上の面
倒さがある。

然しそれでも何のことはない、*Breacan-fèile* と *fèile-beag*
との二つが高地人の服装の主要部を構成してゐるのだと簡單
に云へばそれまでである。*Breacan-fèile* とは *Kilt* と呼ばるゝ
腰袴と *Plaid* と呼ばるる格子縞の羅紗布の上體の着物から
出来てゐる。*barren* の羅紗十二ヤルを二つ折りにし、その六
ヤルを手際よくひだとつて帯紐(*bad*)で胴體にまきつけ下半
分を腰袴とし、残りの六ヤルはブローチで肩でとめ、背後に
垂らしておくのだと教へられる。ひだのととりやで縞柄が表

によくあらはれるやうになる。そこに着様の得手不得手があ
る。斯のやうに上下續きになつたものが *Breacan-fèile* と呼
ばれるものである。次の *fèile-beag* と云ふのはタルタンの六
ヤルの毛布を用ゐて作られ、ひだとり縫うて腰の周圍に革紐
でくゞりつけるのであるが、兩端に半ヤード宛ひだかざりを
せずその儘に残して、前面で重ね合わせるである。これは
袴丈けのことであるから往々路上で見うける袴姿なのである
何かの催しや儀式に着飾つて出る盛装になると愈六つかし
い規則がある。洋服は簡單で經濟的で和服の如く幾種類も必
要でないから輕便であり、吾々は是非衣服改良の必要がある
などと、飛んでもない議論を吐くにはもう少し歐米人の生活
何か事ある時の服装の種類と几帳面さとなよく研究する必要
がある。身分ある男子の服装が茲に述ぶる高地人の盛装に等
しき複雑性をもつてゐて、和服改良論者の口にする程の簡單
なるものでないことが恐らく一般に知らるゝ日が来るであら
う。餘談はさて置いて高地人の盛装のことを少しのべて見た
い。

盛装と雖も前述のものと大差がなく *fèile-beag* と云はる腰
袴と隸屬の族門を表はす一定のタルタンの毛布の上體着と、
族門の表象たる縞柄をもつ長靴下、菱形の銀ボタン附きの胴
着を着る。胴着の着地は木綿のこともあり、びろうどのこ
ともあり、タルタン織のこともある。軍人ならぬ人々は好ん
で緋若くは白若くは格子縞の直衣をつける。深みの淺い短靴
山羊の毛皮の前袋、記章と紋飾のある廣い帽子、格子縞毛布
の上體着をとめる可きブローチ、腰の周圍にくゞる帯紐及び
刀帶、武器としては *Claymore* と呼ばれるゝ刃廣ろの長刀、*dish*

と云はるゝ短刀、*Scandubh* と云はるゝ右脚の靴下の装飾ヒストル、角製の火薬入、以上が高地人の盛装である。

更に各部分について六つかしい規則を聞くと斯うである。
先づ第一に袴からはじめやう。

(一) 腰袴に三種ある、*cin*をあらはす縞柄のもの、狩獵の時穿つもの、及び盛装用のものとの三種である。盛儀に列する時には勿論盛装用のドレス、タルタンを着用する。自分自身特有のタルタンを有つて居る人はまた勿論自身の特有のものを穿つのであるが、さうでない時は上半分を克蘭の縞物を用ひ下半分を狩獵用のものを着用するか、或るは逆に上半分は狩獵用を着、下半分は克蘭の縞物を用ふるか、二種取り合はせて着用する。高地人には既に述べた如く隸屬する克蘭と、單系血族である家族の小團體なるセプト(*sept*)とを兼有して居る者がある。而してセプトをあらはす縞柄が存在する場合がある。然し時にはセプトとして何等特定のタルタンをもたぬ場合もある。克蘭ズメン(*clansmen*)にして自己一門のセプトをあらはすタルタンを有するため場合は克蘭のタルタンを用ふるのである。盛装のドレス、タルタンの場合には必ずキルト(腰袴)ブレイド(上體着の毛布)ホーズ(長靴下)の三揃は缺かしてはならないのである。

(二) 上體着の毛布 これは既に長さ巾の説明をなしたが、長くて肩掛け用のブレイドと方形のショール型のブレイドとの二種がある。四角なショール型のもは舞踏の際着用するものである。従つて長いブレイドは刀帶の上にかぶさるやうに着用されるものであつて、舞踏室では之を脱ぎ去らねばな

らぬ。而して腰袴も長靴下も共にブレイドと鈎合つたものでなければならぬ。

(三) 帽子 男子用なるに拘らず *bonnet* と呼ばれてゐる。廣い青色のものであつて、其の形 *Balmoral* 帽に似たものと '*Glenquarry*' と云はるゝボンネットがある。後者は大昔からのものでなくて百年以前から出来たものと云はれて居り、正式のものでないが今日は併用されて居るのである。着用者の克蘭をあらはす標語付きの紋章を附け、時にはその上に尙克蘭又はセプトをあらはす常緑樹の記章をつけて居る。

(四) ガータ 巾一吋ばかりの緋色の毛編みのレイスであつて模様及び結び方は一定してゐない。然し *Shooin gartain* と呼ばるる特種の結び方がある。薔薇飾りをつけたガータは近代に出来た工夫であつて正式ではない。

(五) ダブレット これは時にはシャケツと呼ばれてゐるものであつて綿布のこともあり、びるうどのこともあり、或は斜に裁つたタルタンで作られて居ることもある。いづれにしても高地の特徴をあらはす縞模様のものでなければならぬ。最も古い型のものには *Cott's gart* と呼ばれる直着がある。普通吾々も知つて居る燕尾服(*Shallow tail*)に似たものであるが、燕尾が短く裁ち切られて居り、寧ろ狩獵服に似たものである。さうして必ず高地の特徴をあらはすホケットの覆ひ(*flaps*)とカフスをつける。ホタンは菱形かダイヤ形であればならぬ。軍人はホタンを悉くはめて居る形式なり、文官はホタンをかけぬ開きダブレットである。

(六) Sporan (前袋) 腰前にぶら下げて居る前袋は山羊の毛

製であることは既述の通りであるが、毛色は黒なることあり白なることあり、又は灰色なることがある。また房飾りの附いてあることもあり、無いこともあるが、房飾りのある方が整つた形式である。

袋の口金具にはグランをあらはす標語と紋章とがあり、裝飾の構圖はケルト式であり、何れもアローチやベルトやバツタル(しめ金)の裝飾意匠と一致するものでなければならぬ

(七) 靴は何れも短靴である 時にはしめ金を用ゐて居ることもあるが、その時はベルトや他のしめ金の裝飾と一致したものでなければならぬ。

(八) ベルト 主要なるものは刀帶であるが、黒皮製で紋章があり、飾りのしめがあるものを用ふ。

(九) 長刀(Claymore) 刀身に二重溝があり、柄は龍目式のもので服裝に相應するタルタンの毛布か緋の綿布で裏つけてある短刀(Dick)も亦適當な模様と正規のケルト式の裝飾を着けたものである。Spanduch は右胸の靴下に着けてある飾であるが、これ亦短刀の意匠と同じ種類の意匠裝飾をつけてある。

(十) ヒストル ヒストルは誠に舊式のもので、今日から見るとおかしき程舊式のものである。單に一つの筒で筒先から填充するものであり、丸なつめこ棒(Cannod)まで銃身につけ添へてあるものである。右側に角製火薬入れを下げてゐるが、その口は前部に向けてある。實に細々した裝飾までが何れもグランを象徵し、全體に亘つて釣合ひのとれたものである。種々のしめがれ、前袋の口

金、帽子の紋章、刀帶及刀の裝飾、アローチ等その大小を問はず一致した入念の裝飾が施されて居るのを見うける。

十八世紀(一七四七年)になりて高地地方のグランの勢力を抑壓する爲めに英國政府はグラン制度を禁止し、タルタンの制服さへ着用することを禁ずるに至つた。今日では如何に、祖人とも雖も交通機關の發達、及び經濟組織の變化の爲めに、祖先傳來の舊い型を固守することが出来なくなり、只何かの儀式の時若くは博物館に於てのみ見るを得るまでに高地人の昔しの盛裝を見る機會がなくなつたのである。その武器に於て既に時代遅れであり、實用的に何等用をなさず、之を用ふるも單に裝飾に過ぎなくなつて居る。若し吾々がこれを見んと欲するならば蘇國人の聯隊に行つてその盛裝の軍服を見る以外にこれを見る機會を得ないのである。余が旅行中つくづく感じたことは昔剛健と苦闘とを續けて來た高地人の天地に運河が作られて汽船が通ひ、鐵道が黒煙を吐いて彼等の狩くらの夢を醒まし、山間の道路にも自動車がかッリンの臭を残して疾驅する今日、高地人の服裝も亦今日の時代に適すべき進化をなさずんば廢滅の民族となつて史上に墳墓の記録を遺すに過ぎなくなるであらう。果せる哉之を地方人に糺すと誠に其通りである。聞く處に依れば日本も亦傳來の服裝が社會生活の變化につれて洋裝に變へんとしてゐるではないか、蘇國のみが舊式を固執して滅亡の民たつことを欲せずと飛んだ處で蘇國人から逆襲を喰つたが誠にその通りであると答へるより他に辭がなかつたのである。以上くどくどく高地人の服裝のことを述べたが、往々邦人にしてダータン、キルのモデルをエザンバラ市あたりで買つて來て得意顔に蘇國通をふりまかんとする人あらば服裝に關する全部を知る必要があるのである。